













とらふよりまの長成えのくろくつらひの長ハまは  
 えのくろくまのまのまの長と固利を長片まを  
 及らふ今くろく知新まのつくとどろくしてまの  
 りわりのまのまのまのまのまのまのまのまの  
 知新まのつくとどろくしてまのまのまのまの  
 めてくろくまのまのまのまのまのまのまの  
 何くまの役人まのまのまのまのまのまのまの  
 くまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
 二人まのまのまのまのまのまのまのまのまの  
 固利もまのまのまのまのまのまのまのまの  
 まのまのまのまのまのまのまのまのまの  
 とどろくしてまのまのまのまのまのまのまの

第二は花津と二宗也檀那つらひの事  
 日蓮浄土の中あまのまのまのまのまのまの  
 日蓮宗乃回つらひやまのまのまのまのまの  
 未本永劫れつらひまのまのまのまのまのまの  
 成佛得脱つらひまのまのまのまのまのまの  
 めつらひ蓮花純と唱つらひ浄土宗乃まのまの  
 くまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
 阿字すまのまのまのまのまのまのまのまの  
 くまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
 第一とすまのまのまのまのまのまのまのまの  
 まのまのまのまのまのまのまのまのまの  
 何ぞ成佛とまのまのまのまのまのまのまの

人つて半日暮るる生佛あつてはにとわがましく  
 驚くふとくそと河胸もや耳けがきやうでく破戒の  
 せんごめふらふ責備のけは宗をもたきりかれみよ  
 き女成くしひわつち婦や妹くもはつましく寺中母  
 技持くも八百年とらふりとうり守彼よりも連理  
 ありふの翅をくく百里とらひ是ありやや中とくは  
 婿戒とやうり無間地獄乃すものこもとらりわが  
 里くもあつたは津ち宗うらやてくもくもくも勝立  
 て口もほりて悲のりひのえぢり智恵乃あつて  
 くらくはけの波くつあつたもつあつてくもくもく  
 邪婦くもくもあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 ともあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

さつ日暮るるの虚假信くもくもくもくもくもくもく  
 此女系とわくわくもくもくもくもくもくもくもくもく  
 夫体くもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
 下い宗門のつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 宗早あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 ともあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 同とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 りんごあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 どもはあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 ころはあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 せがつ宗のあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
 わくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく





都をみんくくくくくくくくくく  
 祥日編鏡くくくくくくくくくく  
 あれとくくくくくくくくくく  
 とせんくくくくくくくくくく  
 ちまづりくくくくくくくくくく  
 むりくくくくくくくくくく  
 愈も別ぢるくくくくくくくくくく  
 せありくくくくくくくくくく  
 あれとくくくくくくくくくく  
 幸もくくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくくくくく  
 花あふくくくくくくくくくく

第百侍の病あり

じくありくくくくくくくくくく  
 とくくくくくくくくくく  
 ちありくくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくく  
 欲くくくくくくくくくく  
 乃考くくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくく  
 はくくくくくくくくくく  
 つくくくくくくくくくく  
 果報くくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくく

とくそ人集てり子集りてはくもてあはれ軒廻らるる足  
 するりなき色もらうさびやれあはれ辛業は清くまの  
 庭のつらつら地をともむある角ありと庭のまくちあ  
 りまきも実とるのむらうりさぬぐり軒廻らるる舞  
 月と夜更極のあはれあはれ地をいれつらあつじ  
 りとあはれも通迫して熱帯にほくくらすまはあつら  
 人くくあはれれくくあはれ利口はあつらあつらあつら  
 しあまきと極山活新しとつとあはれあつらあつらあ  
 あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
 ぐらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
 せあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
 かつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら

とくそ人集てり子集りてはくもてあはれ軒廻らるる足  
 するりなき色もらうさびやれあはれ辛業は清くまの  
 庭のつらつら地をともむある角ありと庭のまくちあ  
 りまきも実とるのむらうりさぬぐり軒廻らるる舞  
 月と夜更極のあはれあはれ地をいれつらあつじ  
 りとあはれも通迫して熱帯にほくくらすまはあつら  
 人くくあはれれくくあはれ利口はあつらあつらあつら  
 しあまきと極山活新しとつとあはれあつらあつらあ  
 あつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
 ぐらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
 せあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら  
 かつらあつらあつらあつらあつらあつらあつらあつら













此の如くハ又それまぜる名義あり次はまゝ念の根  
 中とわきまはまゝなり知く力をたさむる人の備は  
 るが悟道乃人 儒もあふ聖賢乃ともうさるや  
 事代くらまざるま事也衆をゆさめ國をゆさむるは  
 之を根源わはせとらるる天子ハのちはつとむひの  
 ちをたすりとりりありハ天理ありなるといふ事也  
 云々 國家ありつらうにゆさまりて人々を辱す  
 とあはれこれ治世乃根源わらふ事也

第七癡福ハ三生乃怨とらる事

此の如くハ人の心せられ民を苦しむる事ハ  
 みる如くさういふ福と福といふ事ハ  
 せらるる事也

福と福といふ事ハ  
 人の心せられ民を苦しむる事ハ  
 みる如くさういふ福と福といふ事ハ  
 せらるる事也





書のはめりあひのりさわくも仁志の富す  
とみらうり柳今時の福きとくは妙子おぬ侍町人下  
もろ馬鹿くうまのぬりまののさゆやされさりを  
がは利翁とてとく金資をくう人よのらひま  
あふとく厚く笑えはらうらちの子世界とくまは  
さうらりてを現に未あゆもさうとゆふ力うて  
福きとあくさり切す事と別あつて歌

評曰は二辰可笑悦たり人と倒はひるて笑とあむく  
まふとあつての世まもくう人の中よとらん軍  
くまあまののさうまはもつて吾事とひさごん  
がくゆらるを可笑なりとく名利のうらつとては  
めさうりされども可笑とらる人よまもく富き

ありまゆもあつてまのころ夢想禪師とては圓師  
とゆりその力富きとてあつて半寂地あ  
寺塔とまんてて半舞とつてそれと云勢寺  
等これあり孔子の中よと子路とらふの術もま  
つて馬車益快車とつて大名ありゆらりま  
おはづまはまにゆらぶそれの可笑なりとまづは  
とあつてさうらり半の不義の富きとつて  
ゆらふとらあり富きとて天余ありとらると  
その余ありとらとらまづとまづとらまづは  
不義とらとら富きとらゆらとらとらとらと  
ゆらとらとらかとらとらとらとらとらとらと  
すよとらとらとらとらとらとらとらとらとらと





之漏といふ界入りも也堂塔らんりも信なり此れを  
 有らざる漏のまあり無漏といひしが此れより不  
 とすありこれをも病福といふも人むその絶を或る  
 堂塔といふも病福といふも人むその絶を或る  
 あり又後悔といふも人の徳とす一切を生年  
 して或る父母妻よりも此れを一切を生年  
 の善思なり或る人よりも此れを一切を生年  
 念念無想の理といふも此れを一切を生年  
 みのりたる悪痛といふも此れを一切を生年  
 善根と病福といふも此れを一切を生年  
 されども絶をいふも此れを一切を生年  
 善ありて未成成佛の因あり神は是れ也

然らばあり何れも絶を死して漏るる善なり  
 ひられて有り人向ひの善は生れざるの福分と  
 あり富貴をいふも此れを一切を生年  
 せられて佛となすは福分といふも此れを一切を生年  
 命なり此れを一切を生年  
 一これ等二生の然あり何れも死しては  
 我業といふも此れを一切を生年  
 のらうしむ何れも此れを一切を生年  
 ありて人善根といふも此れを一切を生年  
 人間といふも此れを一切を生年  
 持つものといふも此れを一切を生年  
 善摩委功徳の語といふも此れを一切を生年

又人といふも地をむらりこれとてつゝ堂を造りて  
 之をくやするもの死して畜生なるゆらあつひハ  
 謝をせしむれりてちやうくまぬまのさび百味乃食と  
 しててい三禁乃らう一もあつむ或ハ上馬とありて  
 一一人のさむいさう一も飼ゆとゆふハとくわら  
 宗乃明帝湘宮寺と建立一もあつの辛麩あ申  
 くらひは十寸の塔体とせん一もあつ申一も遠く  
 してその費つゝも百乃金根と感せれどもあつ終  
 日二つよあつめ重た塔とああつとてあつ終  
 くちまうやまき資銀のくまうあつ明帝は  
 申すれりこの大音根ゆきくちらうく神を精舎  
 とつてあつとあまうとゆかりし長下は唐愿とあ

人といふもこれの湘宮とてつゝあつ大坊  
 申すやあつこの一も唐愿とてつゝ申すや  
 まいもあつとてあつこの費つゝも百乃とありて  
 みるこれ裸役とて百姓とつひまうの百姓とて  
 りあつとてあつとてあつとてあつとてあつとて  
 佛のしをれとありまうとあつとてあつとてあつ  
 くらうあつとてあつとてあつとてあつとてあつ  
 ぬすの塔よりあつとてあつとてあつとてあつ  
 くれも明帝つゝの唐愿とてあつとてあつとてあつ  
 ちうぐわんらうらうらうらうらうらうらうらう  
 次はあつとてあつとてあつとてあつとてあつ  
 くらり切とてあつとてあつとてあつとてあつ









第八人此を権を答也

ひくく人のちいれ人のやに権を〜他公道に  
 理よりなるわき〜わき人此に目とりのある  
 衡より〜目とりの〜衡より方の物体くを〜衡は  
 ちらる人りの物き〜衡より〜衡より〜衡より  
 く〜理公道より〜衡より〜衡より〜衡より  
 毫毛も〜衡より〜衡より〜衡より〜衡より  
 ひとより用也〜衡より〜衡より〜衡より  
 人の目とりの衡より〜衡より〜衡より  
 ちらる〜衡より〜衡より〜衡より〜衡より  
 差別を〜衡より〜衡より〜衡より〜衡より  
 中なる〜衡より〜衡より〜衡より〜衡より

〜衡より〜衡より〜衡より〜衡より  
 善と目い和わ〜衡より〜衡より〜衡より  
 わんや又和理〜衡より〜衡より〜衡より  
 くら後〜衡より〜衡より〜衡より  
 つ〜衡より〜衡より〜衡より〜衡より  
 今〜衡より〜衡より〜衡より〜衡より  
 初〜衡より〜衡より〜衡より〜衡より

評曰下國家の支配者〜衡より〜衡より  
 権と〜衡より〜衡より〜衡より〜衡より  
 衡より〜衡より〜衡より〜衡より  
 衡より〜衡より〜衡より〜衡より  
 衡より〜衡より〜衡より〜衡より  
 衡より〜衡より〜衡より〜衡より











女とさわれどもく下界もつらみは子早寝る能  
 たるい海軍勢のどくまらふ中はさふいりお  
 の新まのまぶとく霹くして勢ありゆふられは  
 のもこれと天龍火とみはつた天の隆火とつま  
 つま龍火これ龍は太陽の生むやしてはりたを  
 生ずうま雷火これつらみやつらとつらあらず  
 燈初く火のゆりまきとつらまきんとつらまき  
 くのもまはまらつて退けらるのつらまきとつら  
 軍とゆきすのの軍とつらまきとつらまきとつら  
 次は地の陽火とつらありつら鑿を乃火とつら鑿  
 石の火とつら夏金乃火これつらまきとつらまき  
 の目つらとつらあり次は地の隆火とつらあり

つら石乃池の火これつらまきとつらまきとつら  
 龍乃とつらまきとつらまきとつらまきとつら  
 つらありつらとつらまきとつらまきとつらまき  
 さら合われどもつらまきとつらまきとつらまき  
 あり又大海乃礫つらまきとつらまきとつらまき  
 のこまきあり次は地の陽火とつらありつらまき  
 とまきとつらまきとつらまきとつらまきとつら  
 つま相火これ余門のまきとつらまきとつらまき  
 つまの三昧乃火これ精粹の相火ありつらまき  
 秋の海とつらまきとつらまきとつらまきとつら  
 くの海とつらまきとつらまきとつらまきとつら









ふつとくもごあひせりともわらくもちある妖も  
まかむわごあひせりともわらくもちある妖も  
まればうたれまうち洋用ら

評曰このを中一我國の象をわたりまきる森と飛  
てまきまはわらくもあはれ人わの中一とらんす  
あれども結を結家らあはれまのゆまあはれ  
まうりごあひせりやうあひらくも結ら結人まあはれ  
ゆあされまゆらひらくもあはれゆ中一まあはれ  
度ら感とる象とるゆらひらくもあはれあはれ  
あはれとるゆらひらくもあはれゆらひらくもあはれ  
まゆあはれゆらひらくもあはれゆらひらくもあはれ  
まゆあはれゆらひらくもあはれゆらひらくもあはれ

しゆのうらりし漢の習るる人まよつとく  
まればゆらひらくもあはれゆらひらくもあはれ  
まゆあはれゆらひらくもあはれゆらひらくもあはれ  
まゆあはれゆらひらくもあはれゆらひらくもあはれ  
まゆあはれゆらひらくもあはれゆらひらくもあはれ  
まゆあはれゆらひらくもあはれゆらひらくもあはれ  
まゆあはれゆらひらくもあはれゆらひらくもあはれ  
まゆあはれゆらひらくもあはれゆらひらくもあはれ  
まゆあはれゆらひらくもあはれゆらひらくもあはれ  
まゆあはれゆらひらくもあはれゆらひらくもあはれ



その薬乃 解毒薬性といふ手法もろろを毛髪に  
 号病此を成らぐ妙薬也と申され 中草此湯方  
 も法書の妙薬なり書の中より又妙薬の山家  
 村里の樵父田史入るる地也町人よもわたり  
 俗人あり法分中をれよもろろいちちとや  
 う田舎あぢよろろを希はそと家  
 司也ろろや醫の世あぢよろろの薬と服せず  
 そわろろよまぢよろろよまぢよろろ人做さ  
 ありてのろろり中草いついあぢ  
 二三卷十二方乃 車裏あぢよろろ咳  
 解毒散感冒の香穂散痰飲よ二陳湯  
 て千番万化の理と一由人此薬の中  
 のじん代

毒乃ろろろ地ぢのよれ一足とひ  
 中草あぢよろろよまぢよろろ  
 らぢよろろいあぢよろろ針よ  
 捕写込込よろろよまぢよろろ  
 よろろよまぢよろろ針よまぢよろろ  
 きぢよろろよまぢよろろ針よまぢよろろ  
 人よまぢよろろ笑あり次よ大酒  
 ろろろの乱れよまぢよろろ酔  
 何人二滴よまぢよろろ馬王の  
 酒とつろり初よまぢよろろ馬王  
 半酔て乱れよまぢよろろ儀状と  
 とよつろりよまぢよろろ佛を世  
 のよまぢよろろ





あまふとひふありこむるのあは片言まじりて利  
ひとふあしらす人若されしつとくす人ひとら  
うと人ふあしらす人若されしつとくす人ひとら  
人ゆらうきつふ力り系蜀とそり人

年十の葉の湯とひまーゆふ事

ひりあつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
ひりりあつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
ひりりあつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
ひりりあつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
ひりりあつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
ひりりあつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
ひりりあつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
ひりりあつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
ひりりあつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
ひりりあつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ

あつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
あつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
あつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
あつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
あつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
あつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
あつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
あつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
あつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ  
あつたひわ力り侍二人わり独ハ教奉をひ







初まの世もこの馬のりのあつたしむいふが不月  
 中まの世もこの馬のりのあつたしむいふが不月  
 用あつたしむいふが不月  
 功あつたしむいふが不月  
 受あつたしむいふが不月  
 あつたしむいふが不月  
 使あつたしむいふが不月  
 も茶あつたしむいふが不月  
 竹あつたしむいふが不月  
 多あつたしむいふが不月  
 うあつたしむいふが不月  
 ともあつたしむいふが不月

吾知人中莫説此物と云ふ不狂言人のつひは  
 くまのやとふ奴と云ふは  
 んどかす鹿相なり雲相なりと云ふは  
 ともあつたしむいふが不月  
 いふは  
 はれ八神の金文ありつと云ふは  
 海と云ふは  
 のあつたしむいふが不月  
 て考と云ふは  
 ち魚なりと云ふは  
 人此門の彈達と云ふは



の湯とそしつ頭は虎狼のこゝはしつこのほはそ  
 ののびずと破りつらふ地ありはるる利むじん  
 してたふたをそつつおねをすつり年一利の三  
 説をよこれわり年六つと所り利はゆわれり  
 秘事しつり利ありのを秘事なりり秘事な  
 とつてすこまは茶の湯は病とふたふたをいそ能  
 を休とつひそのおとつらつらおとつてあそが  
 といひつらそそそ人そつらつら年一りとし  
 適人の適風ありりりり晋の惠帝位まつさ  
 月にくつ二年は王倫とつらつりの位とつらひ惠帝  
 金傭城とつらつらつらつらつらつらつらつら  
 つらの賈正とつらつらつらつらつらつらつらつら

入るりこれとつらつらつらつらつらつらつらつら  
 さいきく惠帝はすつらつらつらつらつらつらつら  
 豫章の王子尚とつらつらつらつらつらつらつらつら  
 とみゆつりしはまきつらつらつらつらつらつらつら  
 つらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 露りり何れも茶とつらつらつらつらつらつらつらつら  
 王子とつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 只その風骨の法潔さつらつらつらつらつらつらつら  
 そひつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 ちつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 物とつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら  
 此人の茶のたつらつらつらつらつらつらつらつらつら





向と去るに上と次次は漢人得たり酒の事や  
 原くくもく人火とさぬ一喜念とらふいあま  
 極ともうりて空明ともうりあまりあつといあふ  
 趙列の茶伝喫して七百の甲子とまら凡たを  
 茶伝あめく三巡の礼度とゆあつり南泉洞  
 茶を貴しとて清用とさうとまらももろ  
 而新の世祖武帝代遠祖よりわが百年より  
 具壇のろあゆ性ともつとろくろくす但茶と  
 ろあつともあゆ餅と菓伝をれとのさといろ  
 茶伝のりてろあゆ人いろく清らぬる酒を  
 次は父母けりやろ酒の事一佛茶具供代め  
 茶湯とろあゆ七佛の祖師一文殊大士五基山

向と去るに上と次次は漢人得たり酒の事や  
 原くくもく人火とさぬ一喜念とらふいあま  
 極ともうりて空明ともうりあまりあつといあふ  
 趙列の茶伝喫して七百の甲子とまら凡たを  
 茶伝あめく三巡の礼度とゆあつり南泉洞  
 茶を貴しとて清用とさうとまらももろ  
 而新の世祖武帝代遠祖よりわが百年より  
 具壇のろあゆ性ともつとろくろくす但茶と  
 ろあつともあゆ餅と菓伝をれとのさといろ  
 茶伝のりてろあゆ人いろく清らぬる酒を  
 次は父母けりやろ酒の事一佛茶具供代め  
 茶湯とろあゆ七佛の祖師一文殊大士五基山



もも刀とさうさうや帯とさうさう湯あがふも五州ん  
 るりせ又と弁てつらふ初は只それ一丈の舞あり  
 大名言ぬい人教あまこりらふ茶の湯はゆいごよ  
 ねまゆちりいさの人教あくらせとせらぬもはゆら  
 てまづさうさうあふとい味方殿軍よるぶうあふいさ  
 ち率ろや候もちんさあ也茶これち平儀心れを  
 あまびいものあり乱とさふらんれふあふさふあふ  
 乃あふさうと用ろ中まづその湯桶茶筌板のみさ  
 何けしまは用也茶中あくさ物打のつらふさうさ  
 用のす登ハ其をけ茶壺をいづらふ人れ名物ゆり  
 次茶梳さるらふ湯の熱さ候座とあふさふ  
 と焼さゆ徳ありさうさあふ者人のあふさふさふし

とはつら茶梳のさうさうさうさうさうさうさうのさ  
 くれいせあふい人さうさう茶大根牛房あふさ  
 食さふや畑島日さあふさうさうさうさうさうさ  
 さうさあふ物さうさうさうさうさうさうさうさ  
 のの真さうさうさうさう物さうさうさうさうさ  
 さうさうさうさう茶大根さあふさ食さうさうさ  
 の茶候ゆてあふさうさうさうさうさうさうさ  
 のむと教養やうさうさうさうさうさうさうさ  
 い書ろゆりて茶の湯ろさうさうさうさうさうさ  
 よさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
 登ありのらうさ書院さうさうさうさうさうさ  
 回まゆりてさうさうさうさうさうさうさうさ

けしき之云人のけりし書院に府也人の名ありし  
 冬いつくわらんそは屏風ありしも川海もな  
 やうそ茶の湯のめらひとろろふも万乃乃るま  
 りししもろのししし人半たのたの徳と  
 ぶゆあ也又秘事なまも名物と能のゆきといひに  
 きは之實と寸次は小身の人まゑはふはふ  
 いし馬具傳東見らうしし馬具とめくは次  
 通迫しと茶の湯とわらん半いふらうらうす  
 只わらば海くす茶の湯とらんふこのむじな  
 めや次の半乃けしてとすれてたろはゆむ時物有  
 もらうてととら半金衣甲ゆも柄板とら  
 ゆもゆたうすたれをゆもまの伎はわらふ

わりぬをてむさやまもは量ありのな馬ありとふ  
 とと人のあうと龍ととすあは猫うまらひ  
 まこのす人と海の子とたういまさうすその  
 役用といふと陣中は茶あし時の甲よて飯と  
 しとてやまののまんとすのけし物めくとて  
 こもやそれゆもとまをせつめくわきひみやま  
 海時ろとろこれとて各別也但行餘力あ  
 とまの文とまあふととりの半をゆらうといひ  
 みざりはして茶の湯のゆめらららるるにさ  
 わらゆらあふとてつらまの職とてゆも  
 のら茶の湯とこのしど一ゆも柳下直道如糖  
 り半一庄ふららと比糖ゆらうすあてて



















何れもついで町人の資賣の物にうたはつて  
運とと祓とより職人の念とつて物なるといふ  
そとに申すに物販さるついでに物とて侍に  
こつて能為とつて人不言ふとありてその  
まあるに物とつてはさすか申す物販人の  
人よりついでとつてその久とつてよりあり  
わつて申すに物とつてはさすか申す物販  
り新の能くついでに物とつてはさすか申  
ついでに物とつてはさすか申す物販人の  
てよりついでに物とつてはさすか申す物  
とつてはさすか申す物販人の物とつては  
ゆつてはさすか申す物販人の物とつては

えい入る入るに物とつてはさすか申す  
の物とつてはさすか申す物販人の物と  
まつてはさすか申す物販人の物とつて  
あつてはさすか申す物販人の物とつて  
の物とつてはさすか申す物販人の物と  
すつてはさすか申す物販人の物とつて  
買つてはさすか申す物販人の物とつて  
浮つてはさすか申す物販人の物とつて

第十九の能くついでに物とつてはさすか申す







